

会員の声

ボランティア的運営体制の是非について

鈴木隆之（中国四国支部会員）

現在、当会の運営は一部の限られた会員によって行われ、運営に携わる会員に多大なる負担が押し掛かっているという実情がある。そして「本質的な問題は 20 年間続いてきたボランティア的運営体制である。それを廃した上で、財源を確保しアルバイトを雇用し運営を安定させたい」という意見が趨勢を占めている。それに対し私見をここに表明する。

私はボランティア的な運営その物に問題があるとは思わない。天文教育や天文普及に篤い志を持ち且つ、全国の同志との交流を図りたいと思う人物が自分の手に負える範囲で仕事を請け負っている分には本人にとっても負担ではなく、寧ろ自己実現の場にもなろう。問題なのは「少数の限られた」会員に全ての負担が押し掛かっていることであろう。少数の限られた会員のみが運営を請け負っているのは、他でもなく率先して仕事を行う人物が少ないからであり、運営委員選挙の立候補率の低さがそれを物語っている。社会情勢が昔と変わり皆忙しく、無給でその様な事に勤しみたいと思う人物がいないという面もあるのかもしれないが、それだけではなからう。

運営に携わった経験のない会員が何かの志を抱いて運営に携わろうとしたい際、障壁となるのは「委員になっても、何をしたいのか解らない。自分に出来ることなのか」という不安や懸念があるのかと思われる。この事は第 22 回天文教育研究会集録 P71[1]と類似しているが、今の私はこれを若手会員特有の問題とは捉えていない。当会は若手が活躍しにくい環境にある訳ではない。学生会費や選挙制度を考えるに、寧ろ優遇されていると思う。ただ、似たような声明になるが在籍年数の少ない会員がすぐに活躍できる環境ではな

いと思う。若手ではなく、リタイア世代で第二の人生は天文普及界の全国交流の場で活躍したいと思った人物も同じような障壁に当たるであろう。

では、具体的にどのようにすればよいのか。

他団体の事例で恐縮だが、今年天文・天体物理若手夏の学校に於いては運営サポーターというボランティアを、業務内容を明示し負担にならない様に配慮すると伝えた上で呼びかけた所、多数募る事が出来たそうだ。

本年の役員選挙に際して行われた、役員業務紹介は大変有意な取り組みだと思われ[2]、編集委員や事務局員に関しても、ある程度業務内容を明らかにした上で公募をしてみても如何だろうか。他にも提言したい事もあるが誌面は限られるので、またの機会としたい。

財源さえ確保できればアルバイトで運営を安定させるのは容易いことであり（いやそうではないか?）、それに対しこれらの取り組みは速効性のある政策ではなく成果が表れるのに時間が掛かるものかもしれない。だが、ボランティア的運営を一概に否定するのではなく、ボランティア的に動こうとする志ある会員を如何に増やしていく取り組みを飽く迄も主軸に置いて、理想論・精神論に当たるかもしれないが一人でも多くの会員が主体的に参加できる会を目指したいと私は考えている。

文 献

- [1] 第 22 回天文教育研究会集録、天文教育普及研究会、p67-75.
- [2] 天文教育普及研究会 会誌 98 号
事務局からのお知らせ

鈴木隆之